

学生に「ノートの取り方」を身に付けさせる(3)

主催：札幌学院大学 FD センター

日時：2014年2月21日（金）15:00～16:30

会場：C館4階会議室（C410）（事前の申し込みは不要です）

対象：本学の教職員のみならず



初年次教育の主要なテーマに「アカデミックスキルズ（論理的思考力や情報収集能力など、大学での勉学や研究に必要な基礎能力）」あるいは「スタディスキルズ（大学で学ぶための基本的な技術・技能）」を身に付けさせる取組があります。これは、高校までの受身の学習姿勢を変え、学生を主体的な学び手に変革する営みといえます

例えば、大学に入学した時点で、学生たちは「真のノートの取り方」を身に付けていません（高校では板書を書き写せば自動的にノートが完成したからです）。したがって、大学の授業で、彼ら彼女らは困惑します。授業を終えたときにノートが真っ白のままだからです。

板書を転写するスキルしか身に付けていない学生に「ノートの取り方」を身に付けさせること。これは大学教育にとってどういう意味を持っているのか？ どのような働きかけが求められているのか？

今回は2013年9月に金沢工業大学で開催された初年次教育学会第6回大会にて「高校での学習スタイルを大学での学びに結び付ける試み -ノートを中心とした講義展開-」という発表題目で、発表を行った皆川先生の参加報告を題材に、参加者間で自由に語り合う場にしたいと思います。

プログラム概要：

15:00～15:45 初年次教育学会参加報告（質疑応答含む）

皆川 雅章 氏（社会情報学部 社会情報学科）

高校での学習スタイルを大学での学びに結び付ける試み

15:45～16:30 フリーディスカッション

獲得目標：

- 大学での学びにおいて「ノートを取ること」の意味と学生の実態について認識を深める
- 学生に「ノートの取り方」を身に付けさせる働きかけについて考えるヒントを得る

報告概要：

- 皆川 雅章氏

初年次学生の高校段階までの、「板書のノートを取る」という学習スタイルを大学での学びに結び付ける試みを行った。90分の講義を、大きく3つに分け、最初と最後の20分を小テストと演習、その回の中心となる部分の50分は、講義の説明をノートに取らせる。高校で50分授業のリズムに慣れた新生にとって、入学時から90分間同じペースで講義を受け続けることは、集中力の持続が困難であり、前後に演習をはさみ、説明を50分には意味があると考えた。講義中の説明や教材提示は、板書やプリント配布以外に、内容に応じてタブレット型端末を活用して行い、その内容をノートに取らせ、並行して、メモやノートの取り方の指導を行っている。学科の概論科目と専門基礎科目における実施結果を報告する